

コミュニケーション能力を育てる言語活動の探究

— 幼・小の発達を踏まえて —

国語教育講座・三浦和尚(代表) 中西 淳

幼児教育講座・深田昭三 青井倫子

附属幼稚園・安田智美 松浦道子 榊鏡大 赤松彩子

片岡香織 平田秀美 西野教大 遠藤美奈子

山本千鶴子 現松山市立宮前小学校

近江理恵 現松山市立窪田小学校

相原洋子 現松山市立荏原小学校

酒井裕子 現松山市立浮穴小学校

附属小学校・金光賢史 吉岡重紀子

越智文明 現松山市立難波小学校

秋山徹也 現今治市立日高小学校

兵頭俊昭 現松山市立粟井小学校

Research of Language Activities that Foster Communication Skills
Kazunao MIURA, Shozo FUKADA, Makoto NAKANISHI, Tomoko AOI,
Tomomi YASUDA, Michiko MATSUURA, Masaru MASUKAGAMI, Ayako AKAMATSU,
Kaori KATAOKA, Hidemi HIRATA, Norihiro NISHINO, Minako ENDO,
Chizuko YAMAMOTO, Rie OHMI, Yoko AIBARA, Yuko SAKAI, Kenshi KANEMITSU,
Akiko YOSHIOKA, Fumiaki OCHI, Tetsuya AKIYAMA and Toshiaki HYODO
(平成25年7月24日受理)

はじめに

本論考は、平成22年度からの3年間の、愛媛大学教育学部学部長裁量経費「学部・附属共同研究」の経費を受けての研究を踏まえている。さらに言えば、年度ごとの研究まとめは、それぞれの年度の附属学校の「研究紀要」に、附属幼稚園・小学校の研究大会での発表を念頭に掲載されている。

本論考は、以上のような流れを踏まえ、教育学部国語教育講座・幼児教育講座と、愛媛大学教育学部附属幼稚園・小学校の共同研究の成果として改めてまとめたものである。

I コミュニケーション能力育成の意義

言葉は、言うまでもなく人間の発達の大きな指標であ

り、あらゆる学習を貫く基盤能力である。それゆえに、幼稚園教育要領においても「言葉」の領域が設定され、また学習指導要領においても、低学年の国語は指導時間上格段の配慮がなされている。

言葉の力は、その機能が「伝達・思考・認識・創造」と説明されることがあるように、人間の「思考」そのもののツールであると同時に、コミュニケーションツールとしても大きな意味を持つ。とりわけ、文字言語が十分でない発達段階においては、音声によるコミュニケーションの発達が、その他のさまざまな発達指針に対しても大きな影響を与えている。

言葉の力、とりわけコミュニケーション能力は、国語科のみならず、すべての教科等、また教科外・学校外での学習の成立そのものを保障するための重要な要素であ

り、またさらに、将来的に組織や社会での充実した活動を支える能力でもある。特に、情報化社会の進展や地域コミュニティの弱体化など、人間関係がますます希薄になることが予想される将来の社会においては、その能力の育成は、現在以上に社会的に重要な意味を持つであろう。そういう意味では、将来的に自立し、社会をよりよく変革する力を育成するための重要な能力要素は、コミュニケーション能力であると言える。

本研究は、人間の社会的基盤としてのコミュニケーション能力の育成を、幼稚園・小学校という発達に即してとらえるとともに、言語活動を通して生活に生きる能力として育成する実践的な方法を明らかにしようとしたものである。

また、今日求められている「言語活動」の推進のために、教育内容（教科内容）を含めたアプローチを試み、その言語活動や言語に関する環境構成を通して、実践的にコミュニケーション能力の育成方法を明らかにしようとする研究でもある。

II 言語活動の内実

一般的に、あるいは国語科教育の用語としての「言語活動」は、いわゆる「読む・書く・聞く・話す」営みという意味での「活動」である。また、現行の学習指導要領(平成20年告示)で強調されている「言語活動」は、国語科において以下のように説明されている。

「国語科において、これらの言語の果たす役割に並び、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。具体的には、特に小学校の低・中学年において、漢字の読み書き、音読や暗唱、対話、発表などにより基本的な国語の力を定着させる。また、古典の暗唱などにより言葉の美しさやリズムを体感させるとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。」(H20.1.17 中央教育審議会答申)

さらに同答申は、

「各教科等においては、このような国語科で培った能力を基本に、知的活動の基盤という言語の役割の

観点からは、例えば、」

と、各教科における「記録、要約、説明、論述といった言語活動」例を提示している。

学習指導全般において言語活動が重視される背景には、例えば理科で実験的な活動が軽視されるとか、実生活につながる単なる知識の記憶を学習とみなすような傾向を排除する必要性、すなわち、学校知と生活知をつなぐ、一体化させるような学習指導を求める考え方があった。さらに国語科として言えば、他教科における学習の定着も、言語化によって行われるとすれば、「言語活動」を通して理解させることが学習の定着につながるという学習観が意味を持つということもできる。

しかし、実際には前述のような提示をもとに、国語科と他教科の関係を、「国語科で培った能力を用いて、各教科の言語活動を展開し、各教科の目標を達成する」というふうを受け止められるきらいがある。が、それでは、国語科の目標達成は「各教科の言語活動を支える能力」なのかとさえいえば、そうは一概に言えないことは明確である。

国語科においては、

ア 言語活動を可能にする、文字、発音・発声、語彙などの力を育てる。

イ 言語活動を通して、言語活動の能力(読む・書く・聞く・話すことができる力)を育てる。

ウ 言語活動を通して、世界への認識を深めたり、言葉への関心や態度などを育てたりする。

と分節して考える必要はないか。

他教科においては、(ア・イ)の力を用いて、それぞれの教科におけるウにあたる力を育てようということである。とすれば、国語科においてもア・イの力にとどまるのではなく、例えば、わからないことを進んで図書館で調べようとする態度、読書を身近なものとして生活に活かす態度、文学や説明文を通して社会や人間についての新しい認識を獲得すること、などといったウの力を見通す必要があるのは当然である。

従来の技能主義的な考え方においては、国語科が、ア・イの力の部分に矮小化されてとらえられてきた傾向があった。逆に、場合によってはウの力を求めるあまり、ア・イの力に目が届いていないのではないかと思われるような思潮もないではなかった。

しかし今日的に国語科学習指導に求められることは、単なる知識ではない言語活動の能力を育てること、そのために、実際に言語活動と言える活動を展開することが求められる。さらに言えば、言語活動の展開の中で、新しい認識や態度が形成され、その達成感や充実感が、次の言語活動を推進する機動力となることが予想され、期待される。

これは例えば次のような説明が可能であろう。

スピーチの仕方を技術的な知識で終わらせずに、実際にスピーチを行うことを通して実践的なスピーチの力を育てる。さらに、そのスピーチがうまくいったという充実感があれば、さらに良いものにして行こうとするモチベーションも生まれるであろうし、スピーチを積極的に楽しもうとする態度(これも能力のうちであると考え)の育成にもつながるであろう。

こういった考え方は、保育場面においては当然のことと考えられている。幼児の学びは、幼児の生活の中であり、生活そのものあるいはごっこ遊び(幼児にとってはごっこ遊びも「生活場面」である)を通して獲得されていく。そういう意味では、保育においては、知識・技能を切り取って一斉学習的な学びとすることは、例外的にしか存在しないというべきである。

後に再述することになるが、本稿で考えるコミュニケーション能力とは、上述したような、生活能力としての言語活動能力であり、また、個人の発展に寄与する個人的・社会的能力として位置付けたい。その育成のために、「言語活動を通して(保育においては生活場面を通して)」という概念が必要であり、しかもそれが実際の生活場面そのもの、あるいはそれに近い場面の現出の中で学習として組織される必要がある。

Ⅲ コミュニケーション能力育成の視点

本研究においては、コミュニケーションの育成について、以下のような実践的な視点を重視した。

1 生活に生きてはたらくものとなるように

本研究の基本的な考え方は、公的な場面でのスピーチや話し合いのみを念頭に置き、単なる話し方のスキルアップを目指しているものではない。それらが不要なものであるとは決して言えないが、それ以上に、「話し合っよかった。」「話し合うことで分かり合えた。」「また、

話したい。」など、現在及び将来において、他者とコミュニケーションすることに喜びや必要感、期待感、充足感を感じる子どもを育てたい。

2 発達や個の特性に応じたものとなるように

本研究は、副題を「幼・小の発達を踏まえて」としたように、『小1プロブレム』と言われる幼稚園から小学校へかけての教育課題の解決に示唆を与えるとともに、発達に即した系統的な教育を実現しようとする側面を持つ。そのため、幼稚園においては、特に人や言葉との関わり場面を中心に、園内の生活場面の環境構成や援助の具体的なあり方について、小学校においては、国語科の授業における「話し合う力」の育成場面を「話す・聞く」に特化した学習場面に限らず、考察の対象とした。

幼稚園での話し合う場面と、小学校のそれとでは、行われる場面の違い(幼稚園では「遊び」を中心とした場面、小学校では「授業」を中心とした場面)から、指導・評価に共通点を見出しにくい側面がある。しかし、「遊びの特質」から両者に共通する同質性を見出し、幼・小の接続をより意識した活動を念頭に置くこととした。

3 自己・他者とのかかわりを大切にするように

コミュニケーション能力は、文字通り、自他とかわるための力である。それゆえ、指導の方針の中にも、学習過程の中にも「かかわり」があるのは必然である。子どもがより自他との「かかわり」を心地よいと感じ、「かかわり」を通じて自分の存在意義を感じることもできるような、指導方法・学習過程を構想する。

Ⅳ 幼稚園の研究——“話したくなる・聞きたくなる”環境構成と援助の工夫

幼稚園では、遊びが生活である。子どもたちはその遊びの中で、言語的な活動や経験をしていく。友達や教師と言葉によるコミュニケーションを交わし、遊びは深まり、広がっていく。

幼児期の子どものコミュニケーション能力を育てる上では、周りの人とのかかわりは欠かせない。友達や教師とのかかわりを通して「話したい」「聞きたい」気持ちが育ち、言葉は獲得されていく。したがって、教師は、生活全体の中で、折に触れて、子どもに経験したことや感じたことを自分なりの言葉で話したり、友達や教師の話の聞いたりする経験を積ませ、言葉を使って表現しよ

うとする意欲や相手の話を聞こうとする態度を育てることが求められる。

幼稚園においてコミュニケーション能力を育成するために、次のことに留意して保育を行うことが必要である。

- 心動かす経験を重ねられるよう、多様な体験の場を保障する。
- 必然的に友達とのかかわりが生まれるような遊びの経験を保障する。
- 日々の生活の中から、子どもが話したいと思える場を発達に応じて工夫する。
- 聞くことの楽しさを感じられるような支援を発達に応じて工夫する。
- 言語環境としての教師の言動を見直す。

また、適切な援助を行うために、発達に応じた教師の役割を次のように捉えた。

- 3歳児に対して
「聞いて、聞いて」の欲求を満たしながら言葉や遊びをつなぐ中継者としての役割
- 4歳児に対して
一緒に遊ぶ友達との関係づくりにおいて仲立ちをしながら調整する役割
- 5歳児に対して
言葉のやりとりを見守り、促し、方向付ける司会者としての役割

これらの点は、具体的には、次のような研究保育の実践を通して考察している。

- ◎「みんなに紹介しよう」4歳児 10月
ねらい……遊んだことや、思ったことを自分なりの言葉で表現しようとする。
- ◎「誕生会の「そうだん」をしよう」5歳児 10月
ねらい……思いや考えを友達と伝え合いながら、みんなで話し合うことのよさを感じる。

V 小学校の研究——“模擬生活場面”の組織化

人は人とのかかわりなしには生きていけない、そして、人とかかわろうとしたとき、ほとんどの場合において言葉を介する。にもかかわらず、世上言われるように、学習と生活が乖離してしまっている現実も少なからずある。それは、教える側の教師も教わる側の子どもも、生活を意識した学習活動になっていないことが一つの原因

になっているからではないだろうか。教わる側の子どもについては、「知らず知らずのうちに」身につけていることが、「知らず知らずのうちに」生活に反映していくこともあるだろうし、そこに大きな問題は感じられない。しかし、教える側の教師には、現在の、または、来たるべき未来の実生活に鑑み、その場に必要能力を身に付けさせようという想定は必要不可欠である。“模擬生活場面”の組織化の考え方が、その全てを請け負えるものではないが、学習と生活の乖離を防ぐ上での有効な手段の一つであるということは言えるのではないかと。

「“模擬生活場面”」とは、現在及び将来における日常的なまたは公的な、「生活を模した場」のことであり、「組織化」とは、それを「意識的に授業に取り込む」ことである。

そのため、現在及び将来の「生活」におけるコミュニケーション場面を可能な限り洗いだし、そこで求められるコミュニケーション能力を、表現力・理解力に関わる知識や技能等の知的な側面、関心・意欲・態度に関わる情意的な側面から明らかにした。その結果が、資料①に示した「生活におけるコミュニケーション場面及びそこで求められる能力一覧表」である。

平成23年度の実践において行った、第1学年「おみせやさんごっこをしようー『ことばであそぼう』の学習においてー」では、学校における異学年交流、家庭における家族での話合い、さらにもっと先の将来において職場での企画会議等を「“模擬生活場面”」として位置付け、それらを「模した場」を「意識的に」授業に取り込んだ。また、第5学年「理由や根拠に基づいて話し合おうー『討論会をしよう』の学習においてー」では、現在及び将来における「会議をする場」を「“模擬生活場面”」として位置付け、それらを「模した場」を「意識的に」授業に取り込んだ（『幼年教育研究紀要2011・初等教育研究紀要第45号』P.87~88 参照）。

本年次は、具体的には以下のような研究的授業実践を行い、検証した。

- ◎「おはなしパーティーをひらこう」1年
目標 ・「おはなしパーティー」に興味をもち、進んで自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたり、話題に沿って話し合ったりする。

- ・友達と一緒に物語を表現することの楽しさを味わう。
- ◎「いろいろな話題で楽しく話し合おう」5年
目標 ・話し合いにおける司会に興味・関心をもち、積極的に司会をしたり、話し合ったりしようとする。
・司会者の役割を知り、話し手の立場や意図を把握しながら、話し合いを主導する。
- ◎「ことばの市場を開こう」6年
目標 ・自分が伝えたいことをはっきりさせ、相手を意識して、発表の内容や方法を構成する。
・発表内容に応じた適切な言葉遣いで、発表する。
・話し合うことや振り返りを通して、話し合うことの意義や言葉のもつ力に気付く。

平成23年度、音声言語に絞って、「①現在及び将来の「生活（家庭生活・学校生活・社会生活）」におけるコミュニケーション場面を可能な限り洗いだし、「②そこで求められるコミュニケーション能力を、表現力・理解力に関わる知識や技能等の知的な側面、関心・意欲・態度に関わる情意的な側面から明らかにする」ための作業を行った（『幼年教育研究紀要2011・初等教育研究紀要第45号』P.86 参照）。

平成24年度は、これをさらに整理し直し、より多くのコミュニケーション場面を洗い出し、そこで「求められる能力」を「関心・意欲・態度（情的）」と「技能（理的）」に分けて設定し、「生活におけるコミュニケーション場面及びそこで求められる能力一覧表」（資料①）のように整えた。

VI 幼・小の研究のまとめ

“話したくなる・聞きたくなる”環境構成と援助の工夫、及び“模擬生活場面”の組織化は、コミュニケーション能力の育成という意味で、子どもにとって「豊かな経験を保障」することとなった。

基本的に、コミュニケーション能力の獲得は、コミュニケーションに関する知識の蓄積ではなく、心地よいコミュニケーション、あるいはコミュニケーションの結果として得られる充実感・満足感・達成感といったものの積み重ねによるものであることは、改めて確認しておきたい。そのための実践の指針として、後掲資料②「音声言語によるコミュニケーション能力育成のための実践的

指針（平成24年度版）」に示した7段階の「指針」があり、また、小学校においては、生活場면을想定するための手がかりを、後掲資料①の「生活におけるコミュニケーション場面及びそこで求められる能力一覧表」のかたちで示している。

資料②に示した7段階の「指針」は、幼・小の発達や特性に応じたものであり、“話したくなる・聞きたくなる”環境構成と援助の工夫、及び“模擬生活場面”の組織化の手がかりになることは言うまでもない。文献的ではなく多分に経験知の要素が強いまとめであるが、実際の保育や授業と照らしながら検証した結果は、机上の空論を回避するという意味では、結果的な蓋然性を持つと考えている。

VII 結語

附属小学校、附属幼稚園と教育学部の国語教育講座・幼児教育講座が一体となって進めた3年間の本研究の目的は、「人間として生きるための重要な能力要素は、コミュニケーション能力である」という基本認識のもとに、まとめれば、

『人間の社会的基盤としてのコミュニケーション能力の育成を、幼稚園・小学校という発達に即してとらえるとともに、言語活動を通して生活に生きる能力として育成する方法を明らかにする。』

というところに置かれていた。また本研究は、その成果をいわゆる「小1プロブレム」の解消の手がかりとすることや、教育学部と附属学校園の共同研究の在り方を具現化することなどへの波及も意識されていた。

コミュニケーション能力の育成を発達としてとらえることは、「音声言語によるコミュニケーション能力育成のための実践的指針」（資料②）という形で結実したと思われる。その内容は、「実践のための方法的指針」と言えるものであるが、当然、「音声言語によるコミュニケーション能力に関わる発達」という、指導者として認識しておくべき「発達」が背景としてとらえられている。

また、そういった発達を把握する前提として、コミュニケーション能力そのものを、「生活におけるコミュニケーション場面及びそこで求められる能力一覧表」（資料①）として整備することができたことは、本研究の大きな成果であると言えよう。

これらは、実は「経験知」の集積である。科学としての研究を推進する立場からは、経験値を軽視する傾向があるが、教育実践に関しては、限定的に実証された科学的知見よりも、実践者で共有された実践知の方が、具体的教育場面においては有効な場合が多い。その意味では、本研究は、附属学校園の教員の真摯な実践を基にした経験知の集積であり、その妥当性と有効性は大きいと考えざるを得ない。そしてそれが、大学教員の理論的な枠組みに基づいて整理されていることにも、価値を見出すことができよう。

ここに、大学・附属における共同的な教育実践研究の一つの在り方を見出すことができる。

さて、本研究では、コミュニケーション能力の育成の方法的基底に、

・[幼稚園] “話したくなる・聞きたくなる” 環境構成と援助の工夫

・[小学校] “模擬生活場面” の組織化

をそれぞれ置き、実践に取り組んだ。これらは、「言語活動を通して生活に生きる能力として育成する方法」というコミュニケーション能力育成の基本的な視点であり、「能力」「方法」とともに一つの整理がなされたことの意義は大きい。さらに、教育現場の実践的研究としては、3年間の実践を通してこの点の確信を得ていったことに価値があり、そういう意味では、十分「実証的」なものになっていると考えられる。

また、研究過程で深田昭三が、

「本研究では、幼稚園と小学校、そして大学の教員が共同して音声言語によるコミュニケーション能力育成に取り組んできた。幼稚園の保育では主として遊びの中でコミュニケーション能力を育成していくのに対し、小学校の国語科では授業の中でコミュニケーション能力の育成が図られる。同じ音声言語による活動であるとはいえ、幼稚園と小学校では一見して異なる言語活動が行われているように思える。3年目の研究の区切りを迎えた現在、幼・小の表面的な違いにもかかわらず、そこには幼・小の「連続性」と「同質性」があることが、理論面からも実践面からも見えてきた点が本研究の大きな成果であると考えられる。」

と指摘したが、「幼・小の連続性と同質性」を「生活」「言語活動」といったキーワードで確認できたことにより、

幼・小の接続の在り方についても大きな示唆を得ることができている。

このように3年間の研究を振り返って、改めて、研究の当初に確認した「一次的事ば、二次的事ば」（岡本夏木『ことばと発達』岩波書店 1985）という発達概念の重要性に思いを致さざるを得ない。しかし当然、一次的事ば(私的言語)から二次的事ば(公的言語)への移行は、ある時期を境に完全に移行するものではなく、それぞれの時期の併存の在りようがある。両者の併存状態の充実を図りながら、移行期をどのように指導するのか、方法的な考察はこれからも継続した課題として残ることになるだろう。

コミュニケーション能力を育てる言語活動

資料① 生活におけるコミュニケーション場面及びそこで求められる能力一覧表

コミュニケーションの種類	コミュニケーション場面	相手	場面	内容	形式	準備	関心・意欲・態度 (情的)		技能 (理的)	
							※ 上段が「話すこと」	下段が「聞くこと」		
一対一	会話	親しい人との会話	-	-	-	-	・相手を尊重し、ともに楽しい時間を過ごそうとする。	・相手の興味のある話題を選択し、相手の話を受けて話題をつないでいく。 ・相手に分かりやすい質問をしたり、相手からの質問に適切に答えたりする。 ・あいづちを打ったり、聞き直したりしながら、相手の話を共感的、受容的な態度で聞く。		
			+	+	-	-	・相手を尊重し、ともに楽しい時間を過ごそうとする。	・敬語を適切に使う。 ・相手の興味のある話題を選択し、相手の話を受けて話題をつないでいく。 ・相手に分かりやすい質問をしたり、相手からの質問に適切に答えたりする。 ・あいづちを打ったり、聞き直したりしながら、相手の話を共感的、受容的な態度で聞く。		
	連絡報告	業務連絡 結果報告	+	+	-	-	・相手に情報を正確に伝えようとする。 ・相手から情報を正確に聞き取ろうとする。	・明瞭な発音と発声で、情報をはっきり伝える。 ・結論から述べたり、明瞭で簡潔な表現を用いたり、伝える情報に番号を振ったりして、情報が正確に伝わる工夫をする。 ・メモを活用して、要点を記録しながら聞く。 ・復唱しながら、情報を確認する。		
			+	+	-	-	・心を含めて、自分の気持ちを伝えようとする。 ・相手の気持ちを読み取り、素直に受け取ろうとする。	・敬語を適切に使う。 ・表情やしぐさ、身のこなしなど、身体の動きとともに言葉(気持ち)を伝える。 ・言葉だけでなく、表情やしぐさ、身のこなしなどからも相手の気持ちを読み取る。 ・相手の言葉に対して、あいまいな態度をとるのではなく、はっきりと応答する。		
	説明	作業説明 使用方法の説明 商品説明 入学説明会 企業説明会	+	+	-	-	・方法やよさを正確に伝えようとする。 ・方法やよさを正確に聞き取ろうとする。	・聞き手の実態をつかみ、言葉遣いや話し方を工夫する。 ・伝えたいことを順序よく整理し、話の中心点を明確にして、事実と意見を区別して話す。 ・相手が理解できているかを適宜確認しながら話す。 ・難しい言葉は、相手に合わせて分かりやすい言葉に言い換えたり、補足説明したりする。 ・大事なことを落とさずに聞く。 ・聞いてみて分からない点や確かめたい点を質問する。		
			+	+	-	-	・相手に敬意をもって接する。 ・礼儀正しく応対する。	・敬語を適切に使う。 ・挨拶や表情、身のこなしも含めて敬意を伝える。 ・相手に対して感謝の気持ちを言葉やしぐさで伝える。		
	指導	称揚 叱責 教授 注意	+	+	-	-	・相手の気持ちを考え、相手の向上を願って話す。 ・相手の話を素直に受け止める。	・伝えたいことを明確にし、的確に相手に伝える。 ・言葉遣いに気をつける。 ・口答えしたり言い返したりせず、黙って相手の言葉を聞き入れる。 ・納得できない点や不明な点は、丁寧な言葉遣いで、相手に質問したり意見したりする。		
			+	+	+	-	・誠意をもって相手のよさを引き出そうとする。 ・誠意をもって相手に応対する。	・取材内容に合わせて事前調査を行う。 ・敬語を適切に使う。 ・話の途中で相手に問いかけて、相手の思いを引き出す。 ・相手の返答に応じて臨機応変に対応する。 ・相手の質問からそれないように答える。 ・結論から言うなどして、自分の思いや考えが相手に伝わりやすいように工夫をする。		
	説得	説得	+	+	+	-	・相手の立場に立って考える。 ・自分の考えや意見を伝えようという強い意思をもつ。 ・相手の思いを素直に聞き取ろうとする。	・相手の思いや願いを聞き出し、受容的・共感的態度で理解する。 ・自分の考えや意見を分かりやすく説明し、根拠をはっきりさせて話す。 ・客観的資料を効果的に使う。 ・相手の考えを自分の考えと比べながら聞く。		
			+	+	+	+	・自分の利益だけでなく、双方にとってよりよい結果になることを目指す。 ・自分の利益だけでなく、双方にとってよりよい結果になることを目指す。	・事前に取材、調査し、話し合いの着地点を見出しておく。 ・資料を効果的に活用する。 ・自分の思いが効果的に伝わるような話の構成や展開を工夫する。 ・自他の考えを整理し合意形成ができる。 ・相手の話の目的や意図を十分に聞き取るとともに、情報を正確につかんで、自分の考えと比べたり、メリットやデメリットを明らかにしたりする。 ・不明な点や確認したい点を質問する。		
面接	進路相談 入学試験面接 就職面接 悩み相談 オーディション カウンセリング	+	+	+	+	・相手のよさや特徴を引き出し、理解しようとする。 ・自分のよさを積極的に相手に伝えようとする。	・相手のよさや特徴をつかむための質問を効果的に行う。 ・受容的、共感的な態度で話を進める。 ・自分のよさや特徴を多角的に把握する。 ・敬語を適切に使う。 ・伝えたいことを明確に短い言葉で話す。 ・結論を始めに述べるなど、話し方の工夫をする。			
		+	+	-	-	・情報を正確にわかりやすく伝えようとする。 ・情報の概要と内容を正確に聞き取ろうとする。	・明瞭な発音で、間や速さを工夫して話す。 ・伝えたいことを明確に話す。 ・敬語を適切に使う。 ・情報の概要を正しくつかんだり、自分に必要な情報を確実に聞き取ったりする。			
一対多・対多・多対多・多対象	放送	集会でお知らせ 館内放送 テレビ放送 ラジオ放送	+	+	-	-	・情報を正確にわかりやすく伝えようとする。 ・情報の概要と内容を正確に聞き取ろうとする。	・明瞭な発音で、間や速さを工夫して話す。 ・伝えたいことを明確に話す。 ・敬語を適切に使う。 ・情報の概要を正しくつかんだり、自分に必要な情報を確実に聞き取ったりする。		
			+	+	-	-	・場を和ませたり、盛り上げたりしようと、楽しい会の雰囲気をつくり出す。 ・話し手が話しやすいように楽しい会の雰囲気をつくる。	・明瞭な発音で、間や速さを工夫して話す。 ・その場にふさわしい言葉遣いで話し、適切な話題を選択する。 ・伝えたいことを明確にもち、それが伝わるような構成を工夫する。 ・共感的、受容的な態度で聞く。		
	スピーチ	自己紹介 近況報告 歓迎会で挨拶 新年会で挨拶 披露宴や祝賀会での挨拶 葬儀での弔辞 儀式での挨拶	+	+	-	-	・伝えたいことを形式に則って滞りなく話そうとする。	・明瞭な発音で、間や速さを工夫して話す。 ・敬語を適切に使う。 ・その場にふさわしい言葉遣いで話し、適切な話題を選択する。 ・伝えたいことを明確にもち、それが伝わるような構成を工夫する。 ・聞き手の心に響くように、事前に取材したことや、自分の経験や体験などをもとにして話す。 ・話す場の形式を正確に理解する。 ・姿勢や目線などの聞く態度を意識する。		
			+	+	-	-	・自分の経験や知識、考えを誠実に伝えようとする。 ・相手に分かりやすいように工夫して話す。	・明瞭な発音で、間や速さを工夫して話す。 ・敬語を適切に使う。 ・その場にふさわしい言葉遣いで話し、適切な話題を選択する。 ・伝えたいことを明確にもち、それが伝わるような構成を工夫する。 ・聞き手の反応を確かめながら話す。 ・説得力をもたせられるように、話題について取材したり資料収集したりする。また、聞き手に合わせて、提示 資料や話の構成、論の展開を工夫したりする。 ・発表機器を活用し、視覚にも訴える。 ・経験や知識を整理して、自分の考えを再構成する。		
	会議	仕事の打ち合わせ スタッフミーティング 企画会議 経営会議 職員会議 委員会	+	+	+	+	・主体的な参加態度で話し合いに臨む。 ・話し合いのルールをきちんと守ろうとする。 ・誠実で公平な立場に立とうとする。 ・自他の考えを深めたり広げたりして向上させようという前向きな心構えをもつ。	・事前に取材や資料収集をしっかりと行い、考えの根拠をはっきりさせておく。 ・自分の考えを的確に伝える工夫をする。 ・自他の考えを整理し、合意形成を目指した発言を心掛ける。 ・相手の話もよく聞き、議題に対しての自分の考えを深める。 ・話し手の目的や意図をふまえ、メモを活用しながら、話の内容を整理しながら聞き取る。 ・話の内容について、自分の考えと比べたりまとめたりしながら聞き取る。		
			+	+	+	+	・主体的な参加態度で話し合いに臨む。 ・話し合いのルールをきちんと守ろうとする。 ・誠実で公平な立場に立とうとする。 ・自他の考えを深めたり広げたりして向上させようという前向きな心構えをもつ。	・事前に話題について取材したり資料収集したりする。 ・話し合いのルールを正しく理解し、ルールに則って話したり聞いたりする。 ・論の立場を明確にして、自分の考えが伝わるように資料を活用したり、話の構成や展開を工夫したりする。また、同じ発表者に対して話の流れに基づいて質問したり意見したりする。 ・自他の考えを整理し、合意形成を目指す。 ・自分以外の人の話もよく聞き、議題に対しての自分の考えを深める。 ・話し合いのルールを正しく理解し、ルールに則って聞いたり、話したりする。 ・話し手の目的や意図をふまえ、メモを活用しながら、話の内容を整理しながら聞き取る。 ・話の内容について、自分の考えと比べたりまとめたりしながら聞く。		
	司会	会議の司会進行 議長	+	+	+	+	・明るく落ち着いた態度で、話し合いの雰囲気をつくる。 ・熱意をもって話し合いを進め、結果に対して責任をもつ。 ・全体に目を配り、公平な態度で話し合いを進める。 ・話し手の考えや意見、良さを引き出そうとする。 ・話し合いを通してより良い考えを生み出そうとする。	・話題について自分なりに取材したり、情報収集したりして話し合いに臨む。 ・事前に話し手の熱意や意見を把握し、話し合いの流れや着地点を計画し、予測しておく。 ・話し合いの最中は、話題の流れを客観的に判断し、話題からそれないように軌道修正をしながら、目的が達せられるように話の流れをもっていく。		
			+	+	+	+	・イベントの雰囲気に応じて、場を盛り上げたり和ませたりする。 ・最後まで責任をもって司会進行を務める。	・イベントの内容について、事前調査をしっかりと行う。 ・出演者と打合せを綿密に行い、イベントがスムーズに流れるように、頭の中で何回もシミュレーションしておく。 ・明瞭な発音・発声で、適切な速さで話す。 ・場の雰囲気を的確に察知し、臨機応変にその場を盛り上げたり落ち着いた様子で司会進行する。		
	劇	漫談 コント 朗読劇 紙芝居 人形劇 能・狂言	+	+	+	+	・伝えたいことをはっきりもって演じることを楽しむ。	・相手に合わせて適切な音量・速さで話す。 ・聞き手の反応を確かめながら、伝えたいことが伝わっているかをつかみながら演じる。 ・身振りや手振り、表情や体の動きなども大切な要素であることを理解して演じる。 ・音楽や効果音、舞台道具などを利用して演技を効果的にする。		

